

2012年12月1日 日本理科教育学会北陸支部大会発表要旨原稿（一部修正）  
当日、都合により発表者を深井から林に交代。

## 「iPS 細胞臨床応用」誤報事件の読み方

### 理科教育への示唆

○深井香純, 林 衛

FUKAI Kasumi, HAYASHI Mamoru

富山大学人間発達科学部

【キーワード】 科学メディアリテラシー, ノーベル賞, 科学政策, 生命倫理

### 1 iPS 細胞誤報事件の経緯

山中伸弥京都大学教授へのノーベル生理学・医学賞授賞決定のニュースから3日後に読売新聞朝刊・夕刊1面をかざった「iPS 心筋移植」スクープは、その2日後に「iPS 移植は虚偽、森口氏の説明、関係者が否定、誤報と本社判断」として否定された。

共同通信やテレビ局が追従、「再生医療に道をつけた」山中氏の業績が、こんなにもはやく現実のものになるのかとの期待が語られた直後だけに、一連の誤報にも注目が集まった。

ところが、事態はそれに留まらなかった。読売だけでなく、毎日、日経、朝日といった大手メディアが過去に森口氏からの売り込みに応じた記事を、今回のように大きくはないものそれぞれ掲載していた事実が明らかになり、各紙がいっせいに検証を始める事態となった。検証記事には、森口氏からの売り込みの時期や内容、新聞社ごとの売り込みの検証の仕方、記事にするかどうかの判断のちがいが詳しく記述されるという科学報道の歴史のなかで貴重な機会となった。

### 2 読売新聞誤報の原因に学ぶ

事実性のチェックが甘かった稚拙な誤報であったのは、他紙が掲載を見送った理由からも明らかだ。ほんとうに森口氏がトップランナーであれば、売り込みという方法などらずに、実証度の高い成果としてオープンにしてからでも大きく報道されただろう。1996年のクローン羊ドリー誕生以来の報道蓄積があり、iPS細胞樹立後、山中教授ノーベル賞への期待が高まり、各社記者陣の準備もあったのだから、専門性が欠けていたための誤報とは考えにくい。

「日本なら無理だった」「日本でも議論必要」「アメリカは柔軟」との見出し、記事内容から、読売は森口氏に利用されたというよりも、生命倫理にこだわるな、研究競争に負けるなどの旗振り役で一番乗りをめざし、森口氏を利用したのだと考えられる。過去の研究捏造、誤報事例との比較をまじえ、科学政策を評価するメディアや市民の視点を育む重要性を指摘する。



## 「iPS細胞臨床応用」誤報事件の読み方 理科教育への示唆

林 衛(富山大学人間発達科学部,  
科学編集者/ジャーナリスト)  
深井香純(富山大学人間発達科学部)

科学研究助成事業課題番号24501245  
原発震災で問われた「発表ジャーナリズムの検証・克服をめざす基礎研究」

## 研究目的

メディア研究

大新聞1面スクープの  
大誤報の記録・分析

各紙一斉検証  
・事実かどうかの判断  
・取材

メディアリテラシー

理科教育のゴールとしての「科学リテラシー」を定めるためにも、  
新聞を教師や生徒が読む際にも参考になる。  
こんな「科学メディアリテラシー」を。

## 研究手法

- ・ 誤報・訂正・検証・関連報道の収集・分析(本報告で速報)
- ・ 過去の「誤報」「研究捏造(疑惑)報道」, これらへの検証報道との比較(一部紹介)
- ・ 聞き取り調査による仮説検証(仮説提示)
- ・ 科学メディアリテラシー的検討→理科教育への示唆

## 「iPS心筋移植」誤報事件の経緯

- ・ 10月11日: 読売新聞1面「大スクープ」, それを受けて, 共同, 産経, NHK, 民放が後追いに入る。
- ・ 翌12日: 読売続報, 午後には早くも「疑い」報道。
- ・ 翌13日: スクープ「誤報検証」開始→他紙も他の「森口」報道の検証へ: 誤報原因や掲載判断の詳細を各紙が競い合うように公開
- ・ 他メディアでも検証特集(ニュース探究ラジオDig, 週刊誌, ネットなどさまざま)
- ・ その後, 検証結果を受けた更迭人事発表





読者新聞 10.11.木

読者の声 7  
 少子化の深刻化 8  
 水産物産出 9  
 読者の声 10  
 北陸風評 11

スペイン国債リ段下げ  
 S&P 投機的水準 目前に

**死の間際 iPSしかなかった**

心筋移植 森口氏

日本なら無理だった

自分救ったタイプ

民自執行部 初顔合わせ  
 菅 党首会議調整へ

62%

民自執行部 初顔合わせ  
 菅 党首会議調整へ

10月11日夕刊1面

検証  
 10月13日夕刊1面

森口氏 治療の事実なし

共同執筆者知らざらず

論文動向 記者にメール  
 東大病院会場で再発

iPS移植は虚偽

共同執筆者 関係者ら否定

北陸風評 10月13日夕刊1面

■森口尚史氏をめぐる各メディアの報道と対応

	iPS 臨床報道	その後の対応など
読売新聞	11日付朝刊など	13日付朝刊で誤報と認め、「おわび」と検証記事を掲載。過去の森口氏の記事も調査へ
共同通信	11日付夕刊用 に配信	12日夕刊に「おわび」を公表。検証記事を配信。過去記事はなし
産経新聞	11日付夕刊 (大阪) など	14日付朝刊で誤報の「おわび」を掲載する予定
朝日新聞	掲載せず	13日付朝刊で、「信頼性低い」と判断し、報道しなかった経緯を説明。1996、97年に森口氏らが肝炎の治療効果を分析した報告の記事を掲載
毎日新聞	掲載せず	13日付朝刊で、記事化を見送った経緯を説明。森口氏に関する過去の5本の記事を検証
日経新聞	掲載せず	過去に掲載した森口氏に関する記事について調査
時事通信	配信せず	現時点の調査で、森口氏に関する記事は過去にも配信していない

10月14日朝日新聞朝刊

臨床研究は事実無根

ハーバード大「該当人物はいない」

学会、科学誌へのみに

iPS 過渡的なもの

山中教授 野依氏とも対談

10月14日朝日新聞朝刊

10月14日読売新聞朝刊39面

森口氏の記事本紙6本掲載

過去分り一本で詐称の肩書

ほかにも数人の遺体

研究成績多くが前易論文

山中氏論文を用か

読者の声 7  
 少子化の深刻化 8  
 水産物産出 9  
 読者の声 10  
 北陸風評 11

朝日新聞

10月12日夕刊「疑惑報道」

10月14日朝刊「検証」報道

iPS 騒動なぜ

客員「特任」森口氏活用

米大学が関与否定

読者の声 7  
 少子化の深刻化 8  
 水産物産出 9  
 読者の声 10  
 北陸風評 11

**iPS臨床応用、森口氏**

**8月**  
から取材依頼

10月14日  
毎日新聞28面

森口氏の売り込みを受け、読売同様、取材をしたが、掲載しないという判断をした毎日新聞

ノーベル賞発表1カ月前 売り込み盛ん

山中論文盗用疑い  
英誌「ニューズウィーク」が森口氏に取材を依頼

**iPS臨床応用、森口氏**

**8月**  
から取材依頼

10月14日  
毎日新聞28面

ノーベル賞発表1カ月前 売り込み盛ん

森口氏の取材依頼の経緯

8月3日 毎日新聞に持ちかけ  
9月3日 読売新聞に持ちかけ  
9月19日 毎日新聞東京本社に持ちかけ  
9月20日 毎日新聞に持ちかけ  
10月8日 読売大いPS細胞研究所の山中伸弥教授がノーベル賞受賞決定  
11日 読売新聞が、森口氏がiPS細胞の臨床応用を行ったと報道

人工多能性幹細胞（iPS細胞）の臨床応用を行ったと一部で報じられた日本人研究者の森口尚史氏が、ノーベル医学生理学賞発表の約1カ月前から、報道した読売新聞以外にも報道機関各社に盛んに取材の売り込みをかけていたことが分かった。【伊藤一部】

**薬品投与でiPS細胞**

2010年2月24日

**卵巣凍結でがん治療後妊娠**

2年後目標に「実用化」

2012年8月4日

毎日新聞「森口」報道の例

がん化せず肝臓細胞に再生

肝がん細胞からiPS細胞

研究チーム成功

ハワード大の

**日本経済新聞** 11月6日(火曜日)

Web 科学報道、裏付け取材に注力

2012/11/6 3:30

日本経済新聞社は過去に掲載した森口尚史氏の研究関連記事12本を調べ、一部に誤りがあったと判断しました。読者の皆様にお詫びいたします。

2004年までの記事は医療機関の患者データを分析して有効な治療法などを導き出すといった研究内容です。こうした研究は欧米でみられ、本誌記者らは東京大学客員助教だった森口氏を取材しました。同氏は関連論文に精通し、専門家を認識していました。

誤りがあったと判断した記事は複数の記者が執筆しました。読者の誤りは森口氏に「実験をしている米ハーバード大学の読者で紹介してほしい」といわれたのが発端でした。同氏は名刺に東大とハーバード大の肩書を併記、科学誌への投稿論文にもハーバード大所属と記していました。記者らは実験室も見たいと考えましたが米国で実験しているとの説明に断念しました。研究内容を別の専門家に尋ねたこともありましたが、問題点は見つかりませんでした。

森口氏は成果を積極的に売り込むため不信感を抱いた記者もいましたが、以前からの取材先でもあり信じて執筆しました。個々の記者の情報を十分に共有できず、虚偽を見抜けませんでした。

日本経済新聞社は、研究者の肩書や発表論文などの確認、共同研究者や別の専門家への照会など事実の裏付け取材と、取材情報の共有に注力し、再発防止に努めます。(科学技術部長 廣克島昌樹)

**誤報原因の考察**

- ・ 事実確認(ウラとり)を怠った単純で稚拙な誤報だったといえる(売り込みを「怪しい」と判断できた記者、新聞社多数。調べたら誤報だとすぐに判明。)
- ・ 問題は、なぜ稚拙な誤報をしてしまったのか
- ・ 「専門性の欠如」(→専門記者の育成が必要論)だけでは、説明できない。なぜなら、1996年のクローン羊ドリー誕生以降、「クローン人間妊娠か？」報道、ES細胞樹立、韓国黄教授ヒトクローン胚研究捏造事件、iPS細胞樹立(ノーベル賞候補とのうわさが昨年も)などの経験・蓄積があったから。
- ・ では、読売誤報の原因は？

**検証すべき仮説**

仮説: 研究煽り競争の先頭に立つため、騙されたというよりも、森口氏の売り込みを利用しようとした。その背景には、倫理へのこだわりによって国際的な研究競争に負けてはいけないという研究者の意識との「同化」があった。

- ・ 根拠1: ノーベル賞授賞決定報道の偏り
- ・ 根拠2: 読売新聞論調「日本でも議論必要」「日本なら無理だった」「アメリカは柔軟」
- ・ 根拠3: 毎日新聞が不掲載の理由のひとつが、倫理委員会承認についての回答があいまいだった点。
- ・ 根拠4: 「クローン人間妊娠か？」報道の際の「クローン人間」という「悪夢」が現実になる前に、「国際的な規制の枠組み作りを一層加速させる必要」も、「同化」だと考えられる。





批判的分析や問題提起(とくに科学報道では)はたいへんだが、同化はたやすい

「原発報道に限ったことではない。他メディアが同調しない中で問題提起型の報道をするのは相応のエネルギーがいる。取材相手との関係悪化というリスクを背負うからだ。気を緩めれば、安易な道を選びたくなる。」

「もう一つは、無意識のうちに取材先と同じ思考に染まってしまう可能性だ。...毎日新聞東京経済部の三沢耕平記者は、東電を担当した時期を振り返って「限られた相手との狭い取材環境の中で、原発は安全だと思い込んでいた。価値観の違う世界と、つながりを持つことが必要だと痛感した」と語った。」

記者の目:原発とメディア=日下部聡(東京社会部)  
毎日新聞 2012年11月30日 東京朝刊

富山大学学術機関リポジトリにPDFファイルを無料公開  
<http://utomir.lib.u-toyama.ac.jp/dspace/handle/10110/10535>

科学メディアリテラシー教材

2002年4月「クローン人間妊娠か？」報道の各紙比較

林 衛  
(東京大学教養学部非常勤講師・当時)

その後、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学、お茶の水女子大学、富山大学などで実践

各紙科学部インタビュー

- 2002年7月11日読売新聞社科学部 柴田文隆記者(医学部担当デスク)
- 2002年8月1日毎日新聞社科学環境部 青野由利記者(編集委員)
- 朝日新聞科学部:取材拒否

02年4月6日(土)読売新聞朝刊

02年4月6日(土)毎日新聞朝刊

手のひらを返したかのような 森口「バッシング」

「経済の死」

IPS細胞研究に独占インタビュー 吠える奥大批判と「ロンリー・ジョ」大熱唱

「ロンリー・チャップリン」を称する森口。その後、The Metropolitan「Can't Get No Satisfaction」を演奏する森口。その後、The Metropolitan「Can't Get No Satisfaction」を演奏する森口。

「あんなに今日は久しぶりに気分がよむ。あの騒動から、20kgも減った気がスッパリした。電撃を受けても、「森口さんやー」言う人、聞いたらもう平気だ。」

と、この種な様子で語る。テキーラをショットで一気に飲む。話さなくなる口のように、この勢いでビールをジョッキ3杯、目を赤くしながら飲み干す。

動物で人間の臓器を作る iPS、倫理の壁どこに？

山中教授 「国民的議論が必要」

人間並みの記憶力を持つマウスや人間の皮膚を持つサルなどが現れるかも... どんな細胞にも変わり得るiPS細胞をもとに、動物の体内で人間の臓器を作り出す研究が進んでいる。山中伸弥京都大教授のノーベル賞受賞でiPS細胞の応用に期待が集まる一方、人間と動物の境界が曖昧になるという倫理的な課題が浮上した。(柳原智康)

マウスとラットが合体した動物は既に生まれている。糖尿病の根本的な治療を目指す東京大医科学研究所の中内啓光教授らは、マウスの体内でラットの臓器(すい臓)を作った。臓器ができないよう遺伝子操作したマウスの受精卵に、ラットのiPS細胞を入れると、生まれたマウスの体内にはラットの臓器ができた。

さらに、臓器ができないようにしたブタの胎児に、人間のiPS細胞を培養した細胞を移植する研究に着手。この細胞は臓器の細胞になるよう方向づけられている。うまくいくとブタで人間の臓器を作ることができる。

肝臓病の治療を目指す横浜市立大の谷口英樹教授らは「マウスに人間の肝臓

倫理問題、安全性についての問題提起は限られていた。山中教授自身が「フルマラソンにたとえれば10キロメートル地点」だと語っているにもかかわらず。

本当の問題は何であるのか

- 誤報は、メディアの現実を知る好機となった。
- 山中教授自身が「フルマラソンにたとえれば10km地点」。理論、技術、安全性、倫理、知財戦略など課題山積みなのに、その内容が報道されない。最高の賞であるノーベル賞なのだから「再生医療に道が開いた」「おめでたい報道」だけでなく、山積み課題をだしても傷つかないはず。
- iPS細胞研究の「現実」が不明のままなのに、政府は200億円から300億へと研究投資増加を発表。
- 「iPS研究で日本再生」って？ まじ？

今後、聞き取り調査を含め、分析・検証を深める。

### 理科教育への示唆

- 「政府のまちがい」を主権者自らの問題だととらえ、考え、行動する有権者・市民を育むのが「公教育」の役割。
- 科学研究や科学技術政策に対しても意見をもっていてよいし、もつべきである(理科教育のゴールの一つでは)。
- 判断材料を提示する役割を担う「近代ジャーナリズム」の現実を理解しながら、理科教育に生かしていく必要があるだろう。

むずかしいことをやさしく、  
やさしいことをふかく、  
ふかいことをおもしろく、  
おもしろいことをまじめに、  
まじめなことをゆかいに、  
そしてゆかいなことをあくまでもゆかいに  
井上ひさし

